

社会技術研究開発事業  
令和5年度研究開発実施報告書

「SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム（情報社会における社会的側面からのトラスト形成）」

研究開発領域

「ローカルエコチェーンをステアリングする  
トラスト調和メカニズムの認知的検討」

森田 純哉  
(静岡大学 教授)

## 目次

1. 研究開発プロジェクト名.....	2
2. 研究開発実施の具体的内容.....	2
2 - 1. 研究開発目標.....	2
2 - 2. 実施内容・結果.....	2
2 - 3. 会議等の活動.....	10
3. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況.....	10
4. 研究開発実施体制.....	11
5. 研究開発実施者.....	12
6. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など.....	13
6 - 1. シンポジウム等.....	13
6 - 2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など.....	13
6 - 3. 論文発表.....	13
6 - 4. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）.....	13
6 - 5. 新聞／TV報道・投稿、受賞等.....	14
6 - 6. 知財出願.....	14

## 1. 研究開発プロジェクト名

ローカルエコチェーンをステアリングするトラスト調和メカニズムの認知的検討

## 2. 研究開発実施の具体的内容

### 2 - 1. 研究開発目標

本プロジェクトの目標は以下の2点にまとめられる。

- 目標1. サイバー社会とフィジカル社会の整合性を要因としたトラスト調和メカニズムの解明
- 目標2. 地域における経済と生活を踏まえた情報エコシステムのフレームワークの提案

### 2 - 2. 実施内容・結果

#### (1) スケジュール

実施項目	初年度 (2023年11月 ~2024年3月)	2年度 (2024年4月 ~2025年3月)	3年度 (2025年4月 ~2026年3月)	最終年度 (2026年4月 ~2027年3月)
<b>項目1</b> リテラシー実装グループ 高校および大学における情報環境の実地調査	第一調査 ↓ 複数機関での調査結果 n > 200 ↓ 現実に即したパラメータ設定	継続調査 ↓ 現実に即したパラメータ設定	収集策： 高校との協定が間に合わなかった際は2年度以降で追加収集	
<b>項目2</b> メカニズム検討グループ ローカルエコチェーンの生起とトラスト調和メカニズム	<b>(1) 課題環境構築</b> ↓ 予備実験 5名以上	<b>(2) クラウドソーシング実験</b> ↓ データ 200名以上 ↓ <b>(3) 認知モデルによるシミュレーション</b> モデル開発      フィッティング      トラスト調和メカニズム検討	検証	収集策： 対応の粒度を調整（定量から質的へ）
<b>項目3</b> 社会実装グループ メカニズム検討グループ 大学生向けローカルSNSにおけるエコチェーン生起およびトラスト調和メカニズムの分析	<b>(1) 授業内導入</b> ↓ 試験的導入 2クラス ↓ <b>(2) ログ分析</b>	分析知見に基づく導入方法の見直し ↓ 収集策： 段階的導入による利用促進、サンプル（クラス）の増加	実装 ↓ <b>(3) トラスト調和メカニズムの実装</b>	トラスト調和メカニズムを実装したシステムの導入 ↓ 環境流用
<b>項目4</b> リテラシー実装グループ リテラシー的介入手法の検討		環境流用	<b>(1) 大学生向けリテラシープログラム</b>	<b>(2) 高校生向けリテラシープログラム</b>
<b>大項目4</b> 社会実装グループ ローカルSNS構築のための経済的評価	<b>(1) ステークホルダーによるローカルエコチェーンの認識調査</b>		調査材料 ↓ <b>(2) ローカルエコチェーンを克服するためのコスト負担可能性</b>	

## (2) 各実施内容

当該年度の到達点①：

(目標) 複数教育機関での情報環境の現状に関するデータの収集 (n > 200)

実施項目1：高校および大学における情報環境の実地調査

実施内容：

プロジェクト開始初年度の研究活動として、本プロジェクトにおいて対象とするフィールドの実地調査に重点をおいた。

本研究プロジェクトでは地域の高校生・大学生をユーザとする信頼される情報エコシステムをアウトカムとする。この最終的なアウトカムに向かうためには、複数の大学、複数の高等学校を対象とした、メディア利用の実態調査が必要である。以下は、本研究プロジェクトを通して調査を予定しているフィールドである。

	大学		高校	
	公立	私立	公立	私立
浜松市	静岡大学浜松キャンパス	常葉大浜松キャンパス	浜松湖南高校	
静岡市	静岡大学静岡キャンパス	常葉大草薙キャンパス		静岡聖光学院

これらのフィールドのうち、本プロジェクトのメインフィールドは静岡大学浜松キャンパスである。このメインフィールドと立地や組織体制、年齢層の点で共通点を持ちつつも、いずれかを変化させたフィールドを設定する。これにより、地域の持つ多様な側面を包含する情報エコシステムを構築する。本年度においては、特に、メインフィールドとは立地と運営形態が異なる常葉大学草薙キャンパス、年齢層が異なる浜松湖南高校に焦点を絞ったデータ取得を行った。他フィールドに関しては次年度以降に順次調査を進める。

調査項目としては、属性（居住地、出身地、居住形態、通学方法）、各種メディア（ソーシャルメディア、新聞、テレビ、ロコミなど）の利用の頻度、それらの入手手段に対する信頼度を含んだ。さらに、各種メディアの利用や信頼度に関する項目においては、地域に関する情報の入手を目的とした場合と、全国に関する情報の入手を目的とした場合で区別した回答を求めた。

なお、静岡大学浜松キャンパスにおけるアンケートに関しては、プロジェクトメンバーである遠山、森田がそれぞれ収集した。常葉大学草薙キャンパスにおけるデータの収集においては、研究協力者である山田雅敏氏に協力を仰ぎつつ、プロジェクトメンバーである市川が実施した。プロジェクトメンバーが所属する静岡大学情報学部の連携校である浜松湖南高校に関しては、高校側のフィードバックを受けつつ、遠山により説明や依頼に関わる資料の作成が行われた。その後、作成された資料が高校側において全校の生徒へ配布された。結果として高校生689人、大学生187人の分析対

象データが得られた。

期間：2023年11月～2024年3月31日

実施者：遠山 紗矢香（静岡大学・講師），市川 淳（静岡大学・助教），竹内 勇剛（静岡大学・教授），森田 純哉（静岡大学・教授）

対象：静岡大学（浜松キャンパス），常葉大学（草薙キャンパス），浜松湖南高校における学生・生徒

実施項目5：地域におけるトラストの経済的評価

実施内容

本項目は項目1におけるフィールドにおける実地調査と同様，質問紙調査を手法とする。ただし，ここでの検討は渦中のユーザを対象とするのではなく，行政や保護者，学校関係者など，本研究プロジェクトにて提案を目指す情報エコシステムに関わる多様なステークホルダーを対象とする。提案システムを社会実装するためには，多様なステークホルダーから価値を認められる必要がある。オンライン上の様々な問題に関して，個人がそれをどの程度理解しているかについては相違があると考えられる。加えて，それらの問題に対する評価についても同様に相違が存在すると考えられる。そこで，どのような特性を持つ個人がどのようにローカルエコチェーンを捉えているかについて，実証的に明らかにすることを目的とした。

上記の目的を達成するために，本年度は，項目1において作成された質問紙を用い，全国の成人を対象としたインターネット調査（1000名を募集）を実施することとした。本調査において，全国の成人は，各自の地域と全国に対する情報の入手手段と信頼を回答した。

期間：2023年11月～2024年3月31日

実施者：高口 鉄平，遊橋 裕泰（静岡大学・教授），遠山 紗矢香（静岡大学・講師），市川 淳（静岡大学・助教），竹内 勇剛（静岡大学・教授），森田 純哉（静岡大学・教授）

対象：インターネット調査に応じた参加者

当該年度の到達点②：

（目標）ローカルエコチェーンの汎用モデル検討のための課題環境の構築  
（予備実験5名以上）

実施項目2：ローカルエコチェーンの生起とトラスト調和メカニズム

実施内容

本項目では，フィジカルな環境を共有する個人がオンライン上で集うことにより生じる意見や態度の局所化（ローカルエコチェーン）を，マイクロワールド実験およびシミュレーションにより検討する。

用いるマイクロワールド環境は，Morita and Inoue (2021) において提案されたコミュニケーションの進化ゲームである。このゲームでは，複数のエージェントと資源が，ネットワーク環境に配置される。個々のエージェントはこの環境から可能な限り多くの資源を取得することを目指す。ゲームにおいて，エージェントは複数の相手に向けてメッセージを送信し，環境内の資源の場所を共有することができる。メッセージの送信は任意であり，他者にメッセージを伝えずに，環境を探索することもできる。この

点に情報の信頼性が関係する。情報メディアの信頼性が高い場合には積極的にメッセージが発信され、低い場合には個人での探索がなされる。そして、情報メディアの信頼性は、メッセージの曖昧性(多義的な解釈の余地)に依存して変化すると想定できる。情報環境内で流通するメッセージの曖昧性が高まると、特定のエージェントに有利な情報環境が構築される(あるいは特定のエージェントに有利な状況を構築するために、メッセージの多義性が高められる)。また、情報の発信に関する責任の所在が曖昧化することで、現実のフェイクニュースと対応する誤情報の送信も生じうる設計を検討した。

本年度は、上記のゲームをマルチエージェント化する取り組みを実施した。また、令和6年1月末に、先行研究(Inoue & Morita, 2021)における状況を用いつつ、情報の信頼を検討する集団実験を予備実験として実施した。本実験において、実験の参加者は、コミュニケーションの進化ゲームを3回繰り返した。ゲームははじめ、単純な状況(小さい環境のなかで図形を使って待ち合わせをする課題)からスタートする。その後、拡大した環境のなかで資源を探索するゲームを実施する。最後のゲームでは資源の取得に協調と独占の選択肢が与えられる。この3つのゲームの各段階において、ゲームの成功率と相手への信頼度を取得した。これらのデータより、コミュニケーションの成熟化と信頼度の関係、裏切りの発生の可能性などを検討した。

マイクロワールドでの行動実験に加えて、情報拡散を予測する認知モデルに関する検討も進めた。まず、ソーシャルメディアにおける人間行動に関して、旧Twitter API経由で取得したログを格納する認知モデルを構築した。この認知モデルは、行動経済学にて議論される人間の認知の多重性(システム1とシステム2)と対応する認知処理を備え、それらの組み合わせによりTwitterにおけるポストの知覚と、リツイート判断を行う。システム1的なポストの知覚は事例ベース推論によって行われ、システム2的なリツイート判断は、他者反応の予測からなされる。このモデルに対して、現実の個別ユーザが行ったリツイート行動を予測するシミュレーションを実施した。

期間：2023年11月～2024年3月31日

実施者：森田 純哉(静岡大学・教授)、大本 義正(静岡大学・准教授)、竹内 勇剛(静岡大学・教授)

対象：マイクロワールド実験は静岡大学情報学部生を対象とした。

当該年度の到達点③：

(目標) ローカルSNSの授業内導入(2クラス)

実施項目2：大学生向けローカルSNSにおけるエコチェーン生起の検討、およびトラスト調和メカニズムの分析

実施内容

本項目は、現実に稼働する地域内のソーシャルネットワーキングサービス(ローカルSNS)である「パンプラージュ」を対象とした実践である。パンプラージュは、本研究のメインフィールドである静岡大学の構成員のみ

がアカウントを作成できるローカルSNSであり、学生生活を盛り上げることを主旨として開発された。本項目ではパンプラージュのログデータから、ローカルエコチェーンの発生に関する事例を収集し、その発生要因およびステアリング手法を検討する。その際、分析に値する十分なデータを取得するために、授業内にてローカルSNSの利用を促す働きかけを行う。また、この実践の効果を検討するために、授業内の参加者を対象としたアンケート調査を実施する。

本年度における上記の実践は、プロジェクトメンバーである森田が担当する1つの授業（授業名：認知科学と行動情報）において実施した。当初計画においては、2つの授業で導入する予定であったが、授業間での干渉を考慮し、1クラスのみの実施にとどめた。当該授業における最終レポート課題において、この実践の経験を含めることを要件としたうえで、受講者は、課題期間（2週間）に最低1つのスレッドを立てること、1週間で5回以上のコメントを他者のスレッドに投稿することを課された。

期間：2023年11月～2024年3月31日

実施者：遊橋 裕泰（静岡大学・教授）、大本 義正（静岡大学・准教授）、竹内 勇剛（静岡大学・教授）、森田 純哉（静岡大学・教授）

対象：静岡大学情報学部生

### （3）成果

当該年度の到達点①：

（目標）複数教育機関での情報環境の現状に関するデータの収集（ $n > 200$ ）

実施項目1：高校および大学における情報環境の実地調査

実施項目5：地域におけるトラストの経済的評価

成果

項目1及び項目5において得られたデータを集約した結果、図1のように地域に関する情報と全国に関する情報で異なる情報の入手経路がとられること、さらにそれぞれの情報の信頼度に差が生じることが明らかになった。図1左の利用率に示されるように、全国に関する情報（橙）はテレビや新聞、SNSを経由して入手されるのに対し、地域に関する情報は地域情報誌や口コミ（青）において入手されることがわかる。全国に関する情報が電波やデジタル通信により届けられるのに対し、地域に関する情報はより身体的な世界と接続した経路で入手されるといえる。また、図1右の信頼度に関するグラフより、いずれの入手経路においても、入手された情報が地域のものである場合は、全国のものであるものに比べて、より信頼されることがわかる。自身の身近において生じる情報に関しては真偽判断が容易であるため、情報を信頼する傾向が高いといえる。このことから地域を対象とするローカルSNSは、高いトラストを導くとともに、他地域との断絶を導くエコチェーン化の危険を有するという本研究プロジェクトの前提が確かめられた。

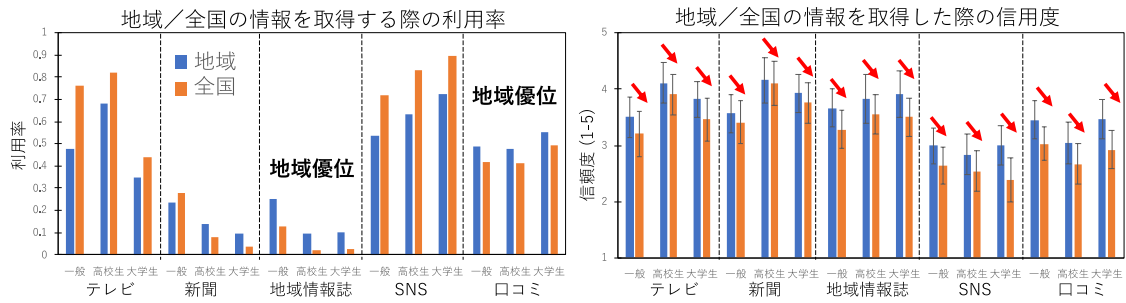


図 1. 項目1および項目5において得られたアンケート結果のまとめ (地域と全国の差異)

当該年度の到達点②：

(目標) ローカルエコチェーンの汎用モデル検討のための課題環境の構築  
(予備実験5名以上)

実施項目2：ローカルエコチェーンの生起とトラスト調和メカニズム  
成果

図2は、項目2として実施したコミュニケーション実験における情報の理解度と情報の信頼に関するデータの集計である。図の左2つにメッセージの理解度、右2つに信頼に関する結果を示している。また、上2つの図は自身から相手への理解度もしくは信頼度を示し、下2つは相手からの理解度、信頼度の想定を示している。いずれの図もはじめのゲーム、2つ目のゲーム、3つ目のゲームの順に、集計値のピークが左から右へと推移している。つまり、実験の進行により、参加者の間でコミュニケーションの手段が確立したこと、それと同時に相互の信頼度が高まったことが示される。

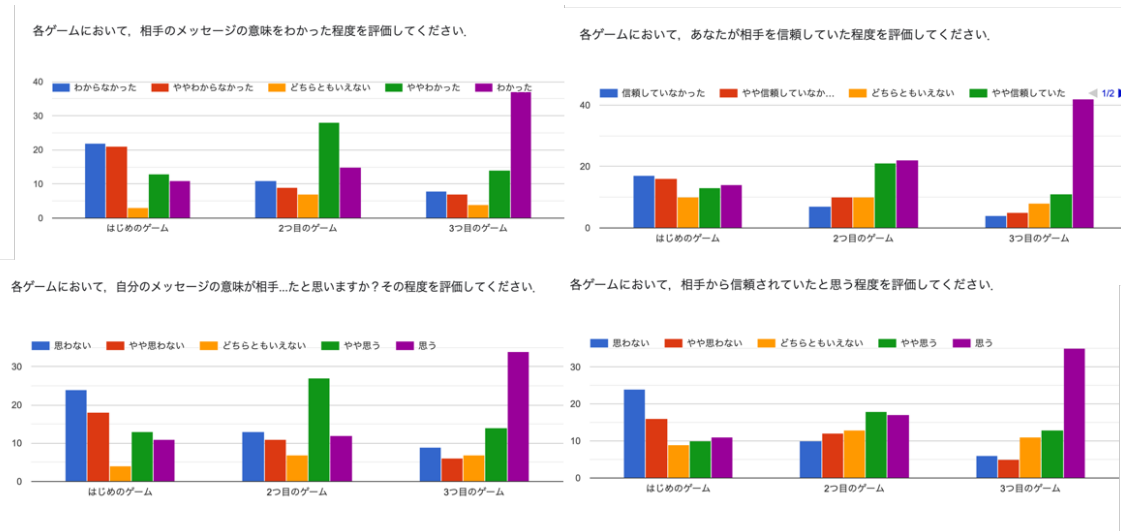


図 2. コミュニケーション進化実験における理解度と信頼

重要なことは、3つのゲームは、時間的な順序関係で区別されるだけでなく、複雑さも異なるということである。今回の実験は、時間を経るごとに、より複雑な課題へと移行する設計であった(単純な協調からより広い環境の協調、さらに裏切りの可能性を含むジレンマ環境へ以降)。それにも関



ならず、理解度と信頼度が増加したことには注目すべきである。特に、独占が可能な3つ目のゲームでも信頼が維持されたということは、本プロジェクトのゴールに対して重要な示唆を持つ。つまり、トラストの維持にはコミュニケーションの進化が重要であるということである。強固なコミュニケーションの基盤が生じると、その基盤を壊してまで独占を行う誘引が低下する。逆に言えば、集団内でのみ意思疎通が可能なジャーゴンを構築することが、集団における(過)信頼を導くことを示唆し、ローカルエコチェーン発生に関する仮説を示唆しているともいえる。

当該年度の到達点③：

(目標) ローカルSNSの授業内導入 (2クラス)

実施項目2：大学生向けローカルSNSにおけるエコチェーン生起の検討、およびトラスト調和メカニズムの分析

成果

図3は、授業内での実践期間中のパンプラージュのログである。垂直に引かれた3本の線は、授業時間を示し、横軸は時間、縦軸は初回授業からパンプラージュに投稿されたスレッドのIDを示している。グラフ内のプロットは各スレッドへの書き込みを示している。

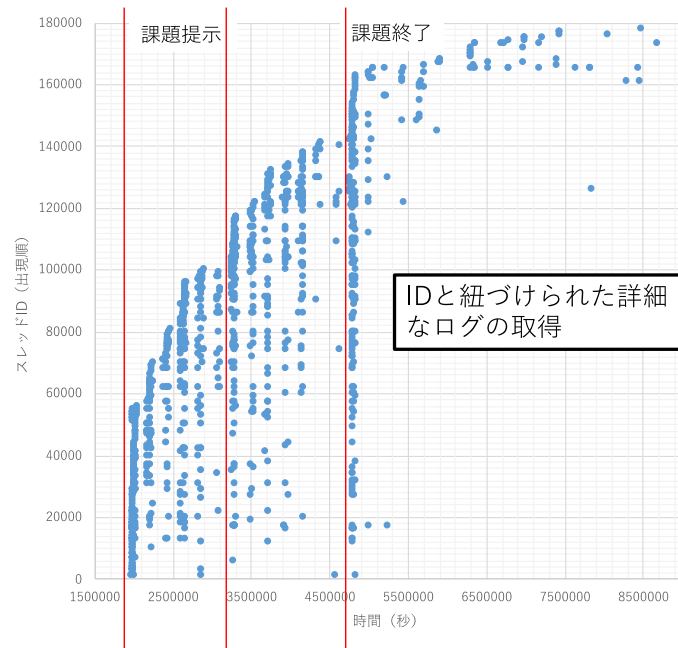


図 3. 実践において記録された行動ログの集計

図より、垂直の赤線の近辺にて、多数のアクティビティが観察できる。また課題終了後は少数のスレッドを除いて、実践中に立てられたスレッドに関するアクティビティが見られないこともわかる。これらの知見は、本研究の実践の特徴(授業内の課題として実施)を示していると見ることもできる。今後、本プロジェクトが目標とする行動データを取得するために、

より日常的な介入を模索する必要がある。

こういった研究手法上の限界がある一方、本年度の実践においては、ローカルSNSの特質、あるいはローカルSNSを研究に利用する利点を示す知見も得ることができた。見出された一つの特質は、実世界と結びついたローカルSNSが、チェーン化と分断を導くことである。パンプラージュには今回の実践以前にもユーザが存在し、月に一つ程度のスレッドが立てられていた。本授業の後に、図3のように多量のスレッドが立てられたことに対し、既存ユーザによる困惑（実際に立てられたスレッドのタイトル例として『botか？ってくらい急にスレッド動いて怖い』）やいらだち（スレッド内のコメント例として「賑わってくれるのはいいのだけど、内容的になんだか荒らしっぽいのが多い」）などが書き込まれるケースも見られた。一方で、授業内の参加者は授業参加者のみが理解可能なスレッド（スレッドタイトルの例として、『「賑わったスレを表彰」なら自演コメでトッブ取れそう』）を立てることで、既存ユーザを排除するローカルエコチェーンが誘発していたといえる。

実際、授業における実践後に取得した質問紙調査では、約半数の参加者(32/66)が掲示板の内容について友人と話したと報告した。そして、このようなオンラインとオフラインのコミュニケーションの二重性に関して、以下のような自由記述が得られた。

- 有用性があると多くの人が感じるスレッドは、「大学生」に関するものであったり、「通学時間」や「一人暮らしの料理」にまつわるものであった。大学生・同じ学校・一人暮らしなどの共通点から評価を得られやすいスレッドが明らかになった。世界中の人が利用できるSNSより地域密着型のネットワーク空間のほうがより信頼性がある。
- 私の書き込みに対して少し冷たく感じられるような返信があり、私はそれを友人に見せました。しかし驚くことにその返信を書いたのはその友人本人であり、また友人としては冷たくする意図はなく、むしろ面白くするための返信だったそうです。

1件目のコメントは、項目1と項目3において述べた地域に対する情報の信頼を裏付けるものである。また2件目のコメントは実際に行われたオフラインコミュニケーションの内容を示すものである。この事例から、オフラインでのコミュニケーションはオンラインでは欠落された情報を補う意義があることが示される。

上記の事例に示されるようにローカルSNSはロコミとオンラインコミュニケーションのハイブリッド型のメディアとしてまとめられ、この特性を活用することでトラストを確保したソーシャルメディアへの発展への展望を導くことができると考える。

#### (4) 当該年度の成果の総括・次年度に向けた課題

プロジェクトの達成目標に関して、概ね十分な進捗を行っている判断する。同時に、今後、項目間での一層の有機的な融合を進めることで、研究目標である「サイバー社会と

フィジカル社会の整合性を要因としたトラスト調和メカニズム」へと接近可能と考えている。

当初の計画書に記載したものの実施しなかった一つの事項は、国際会議における海外での関連情報の収集である。本年度は、研究スケジュールの都合により、国際的な活動は、オンラインでの海外研究者とのミーティング（1月26日にフロリダ州の研究機関IHRC所属研究者と認知モデルを用いた情報拡散について議論）にとどまった。この予算（35万円程度）を繰り越すことで、R6年度以降の研究成果の国際化を充実させる。

### 2 - 3. 会議等の活動

年月日	名称	場所	概要
2023年11月8日	プロジェクトミーティング	静岡大学	今年度実施項目の確認, 項目1における質問紙の作成.
2023年12月5日	プロジェクトミーティング	静岡大学	プログラム全体会議内容の共有, 項目1の予備調査結果について, 項目3の実施計画
2023年12月20日	プロジェクトミーティング	静岡大学	情報ネットワーク法学会での発表内容の共有, 項目1および項目5の本調査の内容の検討, 項目3の実施計画
2024年1月5日	プロジェクトミーティング	静岡大学	サイトビジットの計画, 学会セッション企画の検討, 項目1および項目3の実施計画. 項目2の構想検討.
2024年1月18日	プロジェクトミーティング	静岡大学	サイトビジットの計画, 学会セッション企画の検討, 項目1および項目3の実施計画. 項目2の構想検討.
2024年1月29日	アドバイザーとの面談	オンライン	R6年度計画の共有, 想定される課題についての検討
2024年2月16日	プロジェクトミーティング	静岡大学	アドバイザーとの面談内容の共有, サイトビジットの計画. 項目1のデータ分析と高校でのデータ収集計画の検討
2024年3月18日	プロジェクトミーティング	静岡大学	サイトビジットに向けた各項目の実施内容の議論
2024年3月23日	サイトビジット	静岡大学	R4年度実施内容の提示と各項目の検討課題の洗い出し.

### 3. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況

本研究において対象としているローカルSNSは「パンプラージュ」というサービス名で

静岡大学構成員向けの運用を行っている。したがって項目3における実践の結果は、静岡大学における情報環境に直接影響を与える社会実践となっている。

#### 4. 研究開発実施体制

##### メカニズム検討グループ (森田純哉)

静岡大学情報学部

実施項目：ローカルエコチェーンの生起とトラスト調和メカニズム

実施項目：大学生向けローカルSNSにおけるエコチェーン生起およびトラスト調和メカニズムの分析

理論的な観点からトラスト調和に関わる知見を蓄積するプロジェクト推進の基盤となるグループである。認知科学的な実験とモデルの構築を担当し、その知見をローカルSNSに導入する。さらに、ローカルSNSの導入によって得られたデータの分析を行う。

##### リテラシー実施グループ (遠山紗矢香)

静岡大学情報学部

実施項目：高校および大学における情報環境の現地調査

実施項目：リテラシー的介入手法の検討

メカニズム検討グループにおいて得られた知見をフィールドへ接続するグループである。また、高校や外部の大学におけるデータ取得のための交渉、フィールドにおける現地調査を担当する。プロジェクト後半において実施するリテラシー的介入においては、カリキュラムを構築し、現地にてカリキュラムを導入し、データを取得分析する。

##### 社会実装グループ (高口鉄平)

静岡大学情報学部

実施項目：大学生向けローカルSNSにおけるエコチェーン生起およびトラスト調和メカニズムの分析

実施項目：地域におけるトラストの経済的評価

プロジェクトにて開発を目指す情報エコシステムの経済的実現性を検討するグループである。また、項目3におけるベースとなるローカルSNSの設計と開発も担う。項目5においては、ステークホルダーを対象とした調査をベースに開発するシステムを社会実装に結びつけるための経済的評価を行う。

## 5. 研究開発実施者

### メカニズム検討グループ (リーダー氏名：森田純哉)

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
森田 純哉	モリタ ジ ユンヤ	静岡大学	情報学部	教授
竹内 勇剛	タケウチ ユウゴウ	静岡大学	情報学部	教授
大本 義正	オオモト ヨシマサ	静岡大学	情報学部	准教授
市川 雅也	イチカワ マサナリ	静岡大学	情報学部	修士2年
佐々木 健矢	ササキ ケンヤ	静岡大学	情報学部	学部3年

注：表中の役職・身分は令和5年度末時点のもの。

### リテラシー実装グループ (リーダー氏名：遠山紗矢香)

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
遠山 紗矢香	トオヤマ サヤカ	静岡大学	情報学部	講師
市川 淳	イチカワ ジュン	静岡大学	情報学部	助教

注：表中の役職・身分は令和5年度末時点のもの。

### 社会実装グループ (リーダー氏名：高口 鉄平)

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
高口 鉄平	コウグチ テッペイ	静岡大学	情報学部	教授
遊橋 裕泰	ユウハシ ヒロヤス	静岡大学	情報学部	教授

## 6. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

### 6-1. シンポジウム等

年月日	名称	主催者	場所	参加人数	概要
令和5年12月20日	第3回「こころと社会の情報学」研究交流会	こころと社会の情報学世話人会 担当幹事：市川淳	オンライン	20名程度	静岡大学と浜松医科大学が合同で主催する研究交流会である。今回においては、本プロジェクトメンバーが企画し、本プロジェクトの紹介を行うとともに、関連する医学研究に関する知見（行動嗜癖に関するもの）を聴講し議論した。

### 6-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

- (1) 書籍、フリーペーパー、DVD
  - ・なし
- (2) ウェブメディアの開設・運営
  - ・ローカルエコチェーンをステアリングするトラスト調和メカニズムの認知的検討, <https://sites.google.com/view/shizuoka-degital-social-trust/>, 2024年3月
- (3) 学会（6-4.参照）以外のシンポジウム等への招聘講演実施等
  - ・情報の健康プロジェクト：アテンションエコノミーの暗翳と『情報の健康』-総合知で創出する健全な言論空間, ローカルエコチェーンをステアリングするトラスト調和メカニズムの認知的検討, 2024年3月26日, 東京

### 6-3. 論文発表

- (1) 査読付き (0件)
  - 国内誌 (0件)
  - 国際誌 (0件)
- (2) 査読なし (0件)

### 6-4. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）

- (1) 招待講演（国内会議2件、国際会議0件）

- ・ 森田純哉（静岡大学），竹内勇剛（静岡大学）：文工融合の情報学研究推進への試みと期待 ～JST RISTEX採択の事例から～，第21回情報学ワークショップ，浜松，2023年12月9日
  - ・ 森田純哉（静岡大学）：パネルディスカッション（分科会 デジタル社会のトラスト），情報ネットワーク法学会第23回研究大会，東京，2023年12月10日
- (2) 口頭発表（国内会議2件、国際会議0件）
- ・ 市川雅也（静岡大学），竹内勇剛（静岡大学）：集団での問題解決場面において集合的知性を有効に利用するためのオンライン対話環境デザイン，電子情報通信学会ヒューマンコミュニケーション基礎(HCS)研究会2024年3月研究会，静岡. 2024年3月2日
  - ・ 塚田瑛介（静岡大学），佐々木健矢（静岡大学），森田純哉（静岡大学）：SNSにおける情報拡散の認知モデル—二重過程理論として捉えた情動と他者視点の切り替え—，第214回知能システム研究発表会，オンライン，2024年3月26日
- (3) ポスター発表（国内会議2件、国際会議0件）
- ・ 市川雅也（静岡大学），竹内勇剛（静岡大学）：オンライン対話システムを利用した創造的な問題解決を実現する多重参与デザイン，INTERACTION 2024（第28回一般社団法人情報処理学会シンポジウム），東京，2024年3月8日
  - ・ 佐々木健矢（静岡大学），森田純哉（静岡大学）：SNSにおけるローカルエコチェーンの形成メカニズムとフェイクニュースの拡散の分析，第10回知識共創フォーラム，石川，2024年3月10日

#### 6-5. 新聞／TV報道・投稿、受賞等

なし

#### 6-6. 知財出願

なし